人から人へ

気仙沼市立鹿折中学校　３年　生駒　大地

先生に引っ張られながら学校へと入る。一人保健室でミッケをやる。同級生が帰ると教室へ行って先生にシールをもらう。これが僕の小学１年生３学期から２年生１学期にかけての生活だ。

僕は昔，何かをきっかけにして不登校になってしまったことがある。毎日，泣きながら母にしがみつき，学校へいくのが憂鬱でしかなかったのだろう。皆がやっていることをやらない。自分が楽しいことしかやらない。そんな僕を不満に思っている人は何人もいたはずだ。「何だ！こいつは」と軽蔑した人も中にはいただろう。しかし，僕自身を不登校という名の暗闇から救い出してくれたのは，紛れも無く，家族や友人，そして先生だったと今は思う。

家族は仕事があるにも関わらず，ずっと近くで見守ってくれ，どんなときでも僕が自分でやれるまで待っていてくれていた。泣きじゃくる僕でも見離さず，学校についてきてくれたり，参加する授業を見ていてくれたり。それが，暗闇に閉じこもる僕にとってどんなに心の拠り所となったことだろう。

友人は泣き虫な僕でも一人の同級生として優しく迎え，受け入れてくれ，たまにしかクラスに顔を出さない僕を元気づけてくれた。そんな同級生のあの笑顔が，あの明るさが，そしてあの温かさが，心の支えになってくれていたのだと思う。更に，「いつ戻ってきてもいいんだよ。」という励ましにもなっていただろう。

先生は，一日中，僕の相手をしてくれるだけでなく，授業中，休み時間，どんな時でも保健室まで僕を迎えに来てくれた。わがままで世話が焼ける僕でさえ，一人の生徒として考えてくれ，一緒に遊んだり，一緒に勉強したりする等，周りと変わらない愛情を注いでくれていた。どんなことがあろうとも，僕という存在を大切にし続けてくれたのは，僕を前の状態に戻そうとしてくれていたからだと思っている。そうのような大きな器，すなわち大きな優しさが，僕を包み込み，暗闇に希望の光を差し込んでくれたのだろう。

このような，多くの人の支えが，僕が暗闇の中で戦うための活力となり，不登校という悪魔を倒すことができたのだ。

この経験から僕はさまざまなことを学ぶことができたと感じている。その一つは人の個性，あるいは性格を受け入れることの尊さだ。僕が不登校だった時，家族や友人，先生は，僕自身を否定することなく，ありのままに受け入れ，心を癒やしてくれた。しかし，それは簡単なことではないだろう。相手の考えが分からなかったり，理解できない行動が繰り返されたりすると，自然に拒絶してしまうのではないだろうか。しかし，そこで拒絶する

気持ちを抑え，手を差しのべてくれた人々に心から感謝していきたいと思う。

また，家族や友人，先生等，自分を支えてくれる人々の存在と，その大切さについても学ぶことができた。僕が不登校という名の暗闇から出てこれたのは，周りの人々がいたおかげだった。柱がないと家が建たないように，人間も周りの人々という支えがないと何もできないのである。だからこそ僕は目指していきたいと思う。誰かの支えになる人間を。

今，世界中にはさまざまな人種や民族，または，多種多様の考えを持つ人々が生活している。しかし，その人々が共存をしているかというと，そうではないだろう。言語，姿，出身，考え方，それらのようなささいな違いからあらゆる差別や対立が生まれ，地域同士，あるいは国同士の紛争や戦争につながっているのが現実だ。更には，それによって，全く関係のない人々が，多大な被害を受けたり，命を落としたりするケースも少なくないだろう。こんな状態が未来の世界でも起こっているのだろうか。

そこで僕は思った。（自分自身が助けられた経験を無駄にしたくない。世界は規模が大きいからまずは，自分ができることからやろう。）と。

その第一歩として身近な友好関係を築いていきたいと考えている。相手の個性や性格を否定せずに受け入れ，理解していく。また，困っている人がいれば，手を差しのべて，支える存在になっていく。その中でも自分を押し殺さず，認めてもらえる努力をする。これらを言葉で終わらせることなく，行動に移すことで，周りにも伝染させ，僕らから人へ，人から人へ，そして更に人から人へという好循環を作っていきたい。これが差別や対立の減少につながり，「誰もが共存できる社会」に少しでも近づいてくれることを願って，今，僕は一歩を踏み出す。